

近代中国における社会調査の実践と困難

—— 李景漢の社会調査論と中国農村社会 ——

穂 山 新

1 はじめに

社会調査はまさに社会学という学問の根幹を支えている方法であるが、社会調査法のテキストにおいて、チャールズ・ブースのロンドン貧困調査やラウンターのヨーク調査、そして日本における横山源之助『日本之下層社会』（1898）や月島調査などが、社会調査の先駆的業績として必ず特筆されてきたように、もともと社会調査は学術的な社会学の研究としてではなく、具体的な問題解決の実践とともに生成・発展してきた歴史がある。

周知のように、1886年から91年にかけて実施されたブースのロンドン貧困調査は、イギリスの国勢調査と間接的な方法による家計調査を組み合わせ、その結果に基づいて「貧困線」を設定し、全ロンドン人口の3割が貧困であると結論づけるとともに、貧困が個人の道徳や慣習ではなく、不安定な雇用という社会的な問題であることを明らかにした（阿部 1993）。このロンドン貧困調査に参加した経験を持つベアトリス・ウェップは、社会問題の解決は個人への活動ではなく社会調査を通じて追求されるべきであることを確信する（Lewis 1991: 54-6）。彼女は後に夫のシドニーとともに、人間ではなく「社会制度」に対する改良を通じた効率性の実現を志向する「応用社会学」を掲げ、この考えに基づいて「ナショナル・ミニマム」の政策理念を提示し、イギリス労働党の思想的基盤を提供したことは良く知られている（江里口 2008）。

アメリカでも1900年代から1920年代にかけて、ラッセルセージ財団などの慈善事業財団による潤沢な財政支援を背景とした、社会改良を目的とするいわゆる社会調査運動（Social Survey Movement）が興隆した。とくに、シェルビィ・ハリソンが指揮して1914年に発表されたスプリングフィールド調査は、調査内容が大規模かつ包括的であっただけでなく、展覧会や雑誌などを通じて一般の人々に広く公開されることで、調査研究をより大衆的なものにしていく役割を果たした（Bulmer 1991: 293-5）。1920年代以降、ロバート・パークを中心とするシカゴ学派社会学が登場し、パークが上述の社会改良目的の社会調査を「計画の策定や政策の助言に関心を持つ社会的な政治家」に過ぎないと辛辣に批判し（Bulmer 1991: 303）、仮説を検証する科学としての社会調査（social research）を掲げ

て以降、社会調査運動は1920年代末までに衰退していくことになる。このアメリカ社会調査運動は、現在のテキストでは言及されることすらほとんど稀であるが、本稿で詳しく検討する中国の社会調査論の大部分や同時期の日本の社会調査の代表的テキストである戸田貞三『社会調査』（1933）が、先行業績としてブースや社会調査運動に多く言及しているように、社会改良目的の社会調査が歴史的に果たした役割は過小評価できないものがある。

こうした、社会政策や社会改良と結びついた初期の社会調査の意義は、いかにして調査対象者を調査に協力させていくか、という社会調査をめぐる古くて新しい問題の文脈においても評価される必要がある¹⁾。例えばウェット夫妻は、社会調査のテキストである *The Methods of Social Study* (1932) の中で、かつて労働組合の調査を行った時の体験として、彼女らが完璧に作成したと自負していた精緻な質問表を、調査対象の経営者や労働者が読んででもその価値を全く理解できず、「むっつりとした顔つきになり、石になったかのごとく沈黙する・・・これ以上それを披露することは社会学者としての信用をほんとうに傷つけてしまうと確信させるに十分なものであった」と、自らの失敗の経験を率直に記している (Webb and Webb 1932=1982: 64-7)。彼女らはこうした失敗を踏まえて、障害者や失業者などの苦境に対する「共感的理解の必要性」や (Webb and Webb 1932=1982: 45-7)、「インタビューは楽しい社交の一形態であると相手が思うようにすべきである」など、調査対象者には専門家としてではなく「人間として」接すべきことを強調している (Webb and Webb 1932=1982: 132-3)。このように、ウェット夫妻にとって社会調査の困難を解消することとは、単なる調査方法の技術的な改善にとどまらず、社会改良を志す知識エリートとその他の（とくに失業や貧困に陥っている）民衆との社会的な連帯や共同性をいかに構築していくか、という大きな課題とも深く関わっていた。それは必然的に、社会政策や社会改良の実践と切り離すことのできないものであった。

以上のような、社会調査を遂行する際の困難と、それと具体的に社会的な問題を解決するための実践との関係について、本稿では具体的に中華民国期（1912-1949）の中国における社会調査研究、とくにその代表的な人物であった社会学者である李景漢（1895-1986）の言論や業績を取り上げて検討していくこととする。1920年代から30年代にかけての中国で隆盛した社会調査研究については、既に多くの学説史的な研究や解説がある（李章鵬 2008、呂文浩 2008、范偉達他編 2008、閻明 2010、首藤 2014）。民国期中国における社会調査の特徴は、ブースをはじめとする初期の著名な社会調査のほとんどが、工業化された都市の社会問題を対象にしたものであったのとは対称的に、貧窮の問題が農村でより深刻であった当時の実情を反映して²⁾、主に農村社会に対する調査が精力的に行なわれていた点にある。既に工業社会であったイギリスの都市労働者を対象としたウェット夫妻ですら、上記のように深刻な挫折を味わっていることを考えれば、農村における膨大な非識字者を相手にしなければならなかった、中国の社会学者たちが直面し

た困難の大きさは想像に絶するものがある。本稿では、李景漢における農村社会調査の思想と実践を検討していくことを通じて、そうした困難を解消するための具体的な方法や理念が何であったのかを描き出していくとともに、これらの試行錯誤の経験の中から、「以農立国」および「ばらばらの砂」という彼の中国社会に対する実践的な認識が生み出されていったことを示していきたい³⁾。

2 民国期中国の社会学と社会調査

社会ダーウィニズムの思想まで含めるならば、中国における社会学の歴史は19世末まで遡ることができるが、専門的な学術研究としての社会学は、辛亥革命後の1910年代半ばに、アメリカのミッション系大学や、中国の大学に招聘された欧米の外国人教師によって設けられた社会学の講座が最初である⁴⁾。

彼ら中国に来たアメリカ人社会学者たちが取り組んだのは、社会学の理論や学説を講義することではなく、積極的に大学の外に出て、学生たちにフィールドワーク型の社会調査を指導することであった。例えば、清華学校社会科学系のディトマー (C. G. Dittmer) は、1914年から17年の間に、北京の郊外で195の世帯を対象に家庭生活費調査を実施した。同じく清華学校のギャンプル (S. D. Gamble) と燕京大学の・パージェス (J. B. Burgess) は、1918年の9月から12月にかけて、北京市警察庁の統計報告を分析すると同時に、北京在住の外国人、中国の官僚、商人などを対象に、質問表を用いて北京の社会状況に対する調査を行った。上海滬江大学のカルプ (D. H. Kulp) は、広東省潮州の農村である鳳凰村で650人の村民に対する調査を行った。バックリン (H. S. Bucklin) は、1923年から24年にかけて滬江大学を訪問した際に、上海近郊の農村である沈家行に対する調査を実施した。以上の調査の多くは、報告書として英語あるいは中国語で印刷・出版され、その後の中国の社会学の研究者や学生に対して重要な指針およびモデルを提供することになった。

1922年にミッション系の大学である北京の燕京大学において、中国で最初の社会学系が設立されたが、教員は全てアメリカ人であった。しかし1920年代の半ばになると、陶孟和 (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス)、陳達 (コロンビア大学博士)、李景漢 (カリフォルニア大学修士)、孫本文 (ニューヨーク大学博士)、言心哲 (南カリフォルニア大学修士) など、主にアメリカの大学で社会学の学位を取得した中国人留学生が次々と帰国し、彼らがそれまでのアメリカ人の社会学者に代わって、民国期の中国における社会学界の指導的地位を担うことになる。その中でも、とくに社会調査系の研究が完全に中心を占めており、例えば1922年から52年までの燕京大学社会学系の学士・修士論文のうち、調査報告系の論文は45%であった (李章鵬 2008: 83)。また1920年代から30年代にかけて、多くの社会調査法のテキストが刊行されている (年表参照)⁵⁾。

1930年代に入ると、呉文藻 (コロンビア大学博士)、呉景超 (シカゴ大学博士)

そして費孝通（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）など、機能主義人類学やシカゴ学派の人間生態学を学んだ社会学者が加わり、「社区研究」（コミュニティ研究）を掲げて、調査対象地の実態を数値化して細々と記述していくそれまでの社会調査に対して、「文化」の全体的な構造を質的に解釈して記述すべきことを主張するようになる。1932年にシカゴ学派の領袖であるロバート・パークが、35年には機能主義人類学のラドクリフ＝ブラウンが燕京大学で講義を行い、次第に「社区研究」が中国の社会学界で重要な位置を占めるようになっていく。ただし「社区研究」は学説や方法論の紹介に比べて、具体的な調査研究の成果は少し遅く、費孝通の *Peasant Life in China* (1939) など1930年代末になってからであった。

以上の社会学者たちは、大学の外でも社会調査の専門組織を設立した⁶⁾。1924年の夏に、アメリカの宣教師を中心に北京社会調査社(Social Research Council)が設立され、パージェス、ギャンブル、李景漢などがこれに参加している。この北京社会調査社を母体に、1925年にニューヨーク社会宗教研究所の支援で、「(1) 国内の重要な団体および各界の領袖の意見を徴集し、(2) 系統的な研究を図るために、各種団体が相互に連繋すべきであり、とくにある種の中央機関の設立が非常に重要である」という目的から(李景漢 1927: 82)、社会調査籌備委員会(the Commission of Social Research)が立ち上げられた。この委員会に基づき、翌26年に、アメリカの教育家や宣教師たちが設立していた中華教育文化基金董事会に運営を委託する形で、陶孟和を秘書、李景漢を調査主任として、社会調査部が組織化されている。この社会調査部において、陶孟和は1926年から7年にかけて北京における48の労働者家庭に対する詳細な家計調査を行い、また李景漢は後で触れるように、27年に北京近郊の4つの農村に対する全面的な社会調査に取り組んでいる。社会宗教研究所の財政支援が満期になると、1929年7月に改組されて北平社会調査所と名を改める。社会調査所は陶孟和を所長とし、「中国近代経済史」「労働問題」などの研究科目ごとに1～3人の研究員が配置され、専門の会計や図書館員、専門の事務職員なども設けられるようになった(社会調査所編 1933: 7)。

以上のような中国における民間の社会学者による社会調査の活動は、たとえば日本の社会学における社会調査研究の本格的な展開が二次大戦後であったことを考えれば、その隆盛には特筆すべきものがあつたと言うことができる。この要因については、先に述べたアメリカ人社会学者の影響のほか、以下の背景を挙げることができる。

第1には、国家・行政による社会調査の根本的な不備である。たださえ国土が広大で人口が膨大である上に、辛亥革命による「中華民国」の成立後も、袁世凱死去後の政局の混乱・分裂と強力な中央政府の不在によって、北米と西欧では19世紀初頭までに整備されていた国勢調査は、民国期の中国ではいくつかの都市や県などで部分的に実施されただけであつた⁷⁾。また社会学者が行った社会調査も

人口、世帯数、年齢構成、家計の収支などに対する実態調査など、本来は行政調査に含まれる内容を多く含んでいたことも、こうした事情を反映している。だから「社区研究」派からの批判にあった通り、政府の社会調査機関が整備されるようになれば、衰退する運命にあるものでもあった（呂文浩 2008: 122）。

第2には、いわゆる「社会学の中国化」という、当時の中国社会学界で緩やかに共有されていたスローガンである⁸⁾。最初期の社会学者の1人である余天休は、「中国社会学者の目的と責任」という講演の中で、「中国は外来の主義を飲み込んでしまうのではなく、中国自らの主義を行なうべきである。簡単に言えば、一種の『中国主義 Chinism』を生み出すべきなのである。この種の主義は、中国社会を改造するという目的のためにも必要であり、中国社会の状況に即して論を立てるのであって、列国の社会状況に即することはしない」と述べている（余天休 1922: 2）。他にも、中国人として最初に燕京大学社会学系の主任となった許仕廉は、「社会学本土化」「本国社会学」を唱え、それは理論の構築、社会奉仕（服務）と社会調査の三つによって構成されるものとしている（李章鵬 2008: 49）。孫本文も、「一種の社会学の中国化」を提唱し、「事実を引用する場合、本国の材料を用いることができる場合、本国の材料を用いる」べきことを主張している（孫本文 1935 [1946]: 2）。これは、社会調査を通じて、中国社会の特殊性を探求していくことを意味するものでもあり、例えば李景漢は社会調査の目的の一つとして、「中国民族精神の特徴、昔からある道德観念、社会組織構造の特殊性を、系統的で科学的な方法で研究し、中国の本来の姿をはっきりと理解しなければならない」ことを挙げている（李景漢 1933: 4）。

最後に、当時の中国の社会学者たちが直接的な社会問題の解決という実践的な関心を強く抱いていたことである。例えば言心哲は、当時の中国を代表する社会調査法のテキストである『社会調査大綱』（1933）の中で、社会調査の目的は、社会の相互の関係性における「不調和」を発見し、改革するためであると説明している⁹⁾。

社会調査は、ただ少しばかり人民の状況と社会的な事実（社会事実）をかき集めるというだけでなく、その目的は社会的な事実を分析し、人民の態度を理解し、及ぶところを観察して、改革を提案することにある。……一切の社会問題の展開には、全て関連した関係——直接的に関連する影響ではなく、間接的な相互の関係——が存在する。中国の現代社会の問題が日に日に多くなっているのも、社会が変化する時において、不調和の現象が発生しているためである。いわゆる「文化失調」は、まさに中国が現在最も好ましからざる一種の社会現象であり、社会問題が発生する大きな原因でもある。社会を調査し、社会問題を研究する人は、この種の好まざる社会現象に対して、改革の責任を負うべきである。（言心哲 1933: 2-3）¹⁰⁾

言心哲は具体的な社会問題として「ストライキの風潮」を挙げ、この問題の原因の大部分は賃金である以上、適切な賃金水準を規定するために労働者の生活コストや生産力を仔細に調査することが、社会調査の重要な役割であると論じている（言心哲 1933: 3）。さらに彼は別の文章でも、「社会調査の目的は、社会事実を理解するためのであるが、社会事実を理解することは、社会調査の最終的な目的ではない。社会調査の最終的な目的は、社会を建設し、社会を改造することである。一つの社会調査報告の完成は、仕事の終了ではなく、仕事のはじまり——社会建設のはじまり——なのである」とした上で、「国情」を顧みない西洋的な思想と制度の盲目的な模倣は中国社会に混乱をもたらすだけであると述べている（言心哲 1934）。さらに李景漢も『定県社会概況調査』（1933）の序言で、「本会（中華平民教育促進会——筆者註）の調査活動は純学問的な研究、いわゆる『調査のための調査』ではなく、実用のための調査であり、その都度本会に与えられた必要のための調査である」ことを断っている（李景漢編 1933: 1）。このような具体的な問題解決のための社会調査という立場に対しては、後に触れるように、シカゴ学派の影響を受けた「社区研究」派からの批判も存在したが、最終的にそうした批判が大勢を占めることはなかった（李章鵬 2008: 87）。

以上のように、民国期中国の社会学界における社会調査研究の隆盛の背景には、社会学がフィールドワークを熱心に行なうアメリカ人社会学者の手によって持ち込まれたという歴史的な偶然のほか、行政による統計・調査の根本的な不備という環境の下で、社会学が輸入学問ではなく中国社会の実態を解明し、そうした実態への正確な認識に基づいて具体的な社会問題を解決していくという、きわめて実践的な役割を担われたことがある。これらの中国の社会調査研究の水準について、大東亜省の囑託で江南農村を調査した経験を持つ福武直は、李景漢、言心哲、費孝通などの農村調査研究を挙げつつ、「大体に於いて米国農村社会学而も初期のその影響を受容してをり、未だ直訳の時代を脱却してゐない。……そして中国農村の特質に適合せる方法的立場に立った「中国農村社会学」の建設は、将来に残されてゐると言はねばならない」と、比較的厳しい評価を下している（福武 1946: 9）。果たして福武の評する通りであったのかはひとまず措くとして、少なくとも実践の水準においては「社会学の中国化」は理念や掛け声に止まっていたのでは決してなく、より徹底的に取り組みされていた事実を、次節で検討していくことにする。

3 李景漢と中国社会調査運動

李景漢は1895年に北京の通県に生まれ¹¹⁾、1917年にアメリカに留学して、ポモナ大学、コロンビア大学を経て、カリフォルニア大学で修士の学位を獲得している。1924年に帰国すると、先に述べた北京社会調査社の幹事となり、26年には中華教育文化基金会の社会調査部の主任および燕京大学社会学系の講師を務めている

る。

アメリカ留学で直接指導を受けた社会学者が誰であるのか、具体的にどのような社会学の理論や社会調査法を学んだのかについては、残念ながら資料の不足もあり詳細は明らかではない。しかし、アメリカにおいて社会調査研究を志す契機となった理由について、中国における社会的な統計・調査の不在が彼の「国恥」の感情を刺激したという体験によるものであることを、李景漢自身が以下のように記している¹²⁾。

前にアメリカの大学で勉強していた時、教室の最前列に座るのを好んでいた。ある日、社会問題研究のクラスが各国の男女の人口の配分を議論し、当時の教員が突然、中国の男女人口の性別の比率、つまり女性百人当たりの男子の数を質問してきたが、中国にはこうした統計はないので、知りませんと答えることしかできなかった。またある日、中国の賃金の上昇・下落の指数について尋ねられたが、やはり答えることができず、中国の社会統計を問われるたびに冷や汗が出て、まさに針の筵に座っているようであった。座る席も最前列から、その後ろの列、真ん中の列、程なく最後の列になり、ついに体が大きく背が高い者の後に座るようになってしまった。中国に社会調査の統計が存在しないことが、私個人に苦痛を与えたため、その時は非常に深い刺激を与えるものとなり、そして私個人が社会調査に従事するという志を立てる要因の一つとなったのである。・・・日ごろ、社会を改善して問題を解決するのだと言いながら、社会を調査せず、問題を研究せず、綺麗事を唱えるだけであつたら、一体何が解決するのだろうか。国民（国人）が一日も早く目覚め、調査事業に対して相当の注目を与えることで、社会を改造するための必ず通るべき道というだけでなく、少しばかりの国恥を雪ぐことができることを望むものである。（李景漢 1933: 10, 下線部引用者）

帰国後に所属した北京社会調査社では、李景漢はギャンブルや燕京大学の学生とともに、北京における人力車夫の社会調査に参加した。そこでは北京市の人力車の数（北京の郊外や家用を合わせて44,200台）を明らかにすると同時に、1300人の人力車夫、200箇所の人力車庫、100箇所の人力車夫の家庭を調査した（閻明 2010: 63）。これが李景漢における最初の社会調査の経験である。

社会調査部の主任となって燕京大学に奉職する1926年以降は、学生とともに北京郊外の4つの農村を調査地に選定し、調査表を用いた面接調査の方法で、人口、家庭の収入と支出、生活状況、衛生や風俗などに対する調査を実施した。懸案は調査地の選定であったが、たまたま学生の1人の父親の別宅が存在している村があり、その父親は救済事業などを行なって「村民は張家に非常に好感を持っている」ことから調査地に決定したという（李景漢 1929: 2）。この調査の報告書は、社会調査部が編集する社会研究叢書の一つとして、1929年に『北平郊外之郷村家

庭』として刊行されている。例えばこの報告書においては、調査地の一つである掛屯甲村の毎年の家庭平均の収入が180.82円であるのに対して支出が163.99円であり、収入が100円以下の家庭が34存在することなど、家計収支の詳細が明らかにされている（李景漢 1929）。

このように、李景漢が社会調査研究に本格的に取り組み始めた時期の1927年に、彼は燕京大学の社会学系が発刊する『社会学界』の創刊号に、「中国社会調査運動」という記念碑的な文章を発表している（李景漢 1927）。この文章で李景漢は、先に述べたアメリカ人社会学者の調査や社会調査部の設立など、この10年弱の中国における社会調査研究の展開を整理した上で、以下のように述べている。つまり彼によると、「中国の社会調査事業はまだ萌芽」の段階にあり、調査の訓練を受けた者が依然として少ないにも関わらず、性急に成果を求める青年が多いために失敗の事例が大多数を占めている。それに加えて、公的な機関の支援がないだけでなく、調査される側も疑いの目で見て回答も曖昧なことが多いため、一時的な好奇心から社会調査に手を出す学生は、すぐに意気消沈してしまうことになる。ゆえに社会調査者の選定には慎重であるべきであり、とくに細心さや臨機応変、謙遜、ユーモアなどの「常識は調査者の資格において主要な条件」であり、そうした人材を養成して大規模な社会調査を実現するためにも、大規模な研究所および政府の社会調査局が設立されることを希望する、という（李景漢 1927: 98）。

この文章を発表して間もなく、1928年に李景漢は晏陽初の招きで中華平民教育促進会（以下「平教会」と略する）に参加し¹³⁾、実際に比較的規模の大きな社会調査に関わる機会を得ることになった。晏陽初は少年時代をミッション系の学校で過ごし、イエールやプリンストンなどアメリカの大学に留学して政治学を学びつつ、YMCAの活動に参加してフランスの中国人移民労働者の支援活動などに従事している。帰国後は五四運動後に各地で展開されていた「平民教育」の運動の調査と組織化に取り組み、1923年に陶行知らとともに中華平民教育促進会総会を北京の清華大学で設立する。平教会は「愚」「窮」「弱」「私」という中国の「四大病」を、それぞれ文芸教育、生計教育、衛生教育、公民教育で克服するという晏陽初の教育思想の下に、ロックフェラー財団の支援を受けながら、当初は中国の各地方の都市で平民学校を設立して識字教育の活動を展開していた。しかし、人口の8割を占める農村を無視して平民教育を語ることはできないという理解から、農村を拠点に識字と生計とを一体化した教育に取り掛かりはじめていた。晏陽初は1926年に、河北省定県（現在の定州市）の翟城村という農村における「村治」の運動を指導していた米迪剛の協力を得て（翟城村の自治運動については後述）、定県を実験地区に定めている。この定県実験区における社会調査を指導できる人材として招聘されたのが李景漢であった¹⁴⁾。

李景漢は翟城村を拠点にして、農民と生活を共にしながら1928年から32年まで調査活動を行った。彼は調査に入る前にギャンブルや平教会のメンバーたちと『郷

村社会調査大綱』(1928)という、調査のための手引書を作成している。調査内容は人口、家族、教育、生活費から宗教、風俗など全般に及び、その成果は33年に『定県社会概況調査』という828頁にも上る報告書として刊行され、民国期中国の社会調査の水準を代表する業績として評価されている(呂文浩 2008: 97)。

その内容を一部紹介すると、李景漢は各村から選び出した1,752人に対して、聞き取りによる個別面接法を用いて識字調査を行っている。その結果、完全な文盲は男51.2%で女94.1%に上ること、また非文盲でも4割近くは新聞が読めないこと、所有農地が少ないほど識字者も減少する関係にあること、青年層では学校に通うようになったことで識字者が増加傾向にあり、10代では5割を超えていること、等々を明らかにしている(李景漢編 1933: 235-42)。他にも廟に対する調査では、多くの廟が辛亥革命後に学校(学堂)に改められて4分の1ほどに激減しているという実態を明らかにしていることその他に、廟会が単なる農民の娯楽としてではなく、農具や織布、食物までを売買をする一大市場であり、県政府が税金を得る重要な場ともなっていることなど、廟会の政治的・経済的な機能について託している(李景漢編 1933: 422-38)。

定県調査は、同時期の燕京大学社会学系が北京郊外の清河鎮で行った調査とともに、社会学者が大部分は非識字層である農村の住民と直に接する形で行った、少なくとも組織的なものとしては最初の社会調査であった¹⁵⁾。この最初の経験に伴う困難を李景漢はどのように受け止め、いかにそれを克服するための試行錯誤を実践していたのかを次節で検討する。

4 社会調査の困難と農村救済——「人情」と「同情心」

4年にわたる定県調査の経験に基づいて、李景漢は『定県社会概況調査』と同時に『实地社会調査方法』という社会調査法のテキストを刊行している(李景漢 1933)。このテキストは、社会調査の目的と意義、種類、歴史を一通り説明し、定県調査で実際に用いた調査表を紹介しているが、とくにユニークな点は調査の中で直面した様々な苦労や困難が、実際の経験に即して極めて具体的に描かれている点にある。

例えば李景漢は困難の内容として、調査人材の欠如、地方ごとの重さや長さの単位の不統一、言語の相違や表現の曖昧などを挙げているが¹⁶⁾、中でも彼が特筆しているものは、調査になかなか協力しようとしないう農村住民の懐疑や無理解であった。「豚の重さが増えたり、頑張って鶏が生む卵の数が増えたりすることは、はっきりと表されるし、その利益もわかりやすい。・・・社会調査事業はそうではなく、中国にこれまで存在してこなかっただけでなく、聞いたこともないものであり、その利益も間接的で、触れたり見えたりする形を持ったものではない。・・・農民は常に怪訝な顔でこう語る。『先生はこんなに根掘り葉掘り聞いて、結局何をしようというのですか!』と」(李景漢 1933: 30-1)。彼が

このテキストを執筆した動機も、「いかにして一般の人、とくに民衆（老百姓）に、調査を受け容れさせ、調査を信頼させ、さらには調査を歓迎してもらい、積極的な支援・協力の段階にまで到達させるのか」を（李景漢 1933: 自序5）、自らの実体験を通じて示していくことにあった。

李景漢によると、定県に調査に訪れた当初は、農民から布教もしくは徴兵、増税のために来たのだらうと疑いの目で見られていた。しかし、平民学校を設立して非識字者に文字を学習させ、農業では科学的方法を教えて豚や鶏の生産を増加させることで、「平教会の人は『いいことをしている（作好事）』」のであって、悪意があるわけではないこと、結局何がよいことなのかを依然はっきりと理解しているわけではないものの、何にせよ『いいことをしている』のは確かであることを、最低限理解してくれるようになった」という（李景漢 1933: 47）。

こうした農村住民の生活上の利益となる活動と同時に、李景漢がとくに気を配ったのは、調査対象者である農民との接し方の具体的な作法であった。例えば彼は、強制的な手段を用いた方法は、農民の側のごまかしや面従腹背を生むものでしかないとはっきり否定した上で、講演や談話の方法で農民に直接語りかけ、臨機応変に分りやすい言葉で、比喩を用いながら説明すべきことを勧めている（李景漢 1933: 36-7）（図1参照）。また「調査」という言葉を使うと農村住民が恐れて警戒するので決して使用せず、代わりに「お訪ね（拜訪）」という表現を用い、同じように「回答」も「ご教示（賜教）」という表現に代えている（李景漢 1933: 61）。

とりわけ、李景漢は調査の成功に実際に効果があったものとして、まず有能で声望のある村の領袖を探し出すこと、調査の説明に当たっては游芸会や映画上映会という場を利用すること、個々の家を訪問する時には村長などを同行させて家の人を呼んでもらうこと、小学校は教師や生徒に村の領袖の親族が必ずいるので最初に訪問すること、村の領袖の協力を得るためにはお世辞を言ったり、おだてたり、「兄さん（老哥）」と親しげに呼んだりなど話し方を工夫すること、道案内者にはささやかな贈り物をしたり一緒に食事をしたりなどすること、等々の例を挙げている（李景漢 1933: 65-6）。彼によれば、「調査員は人情に通じ、人の心理に迎合し、いたるところで人の好感を獲得しなければならない。これは決して騙しているのではなく、環境に適應する一種の手段であり、それによって調査の目的を實現しようとするものなのである」（李景漢 1933: 51）。このように、彼は実際の調査経験の中から、「人情」（人と人との付き合いの作法）を理解することが、農村住民との信頼関係を築く際の重要な鍵であることを述べている。

しかしこのような方法は、調査者に対して専門家・研究者としての能力以前に、現場で調査対象者の心情に深く寄り添い、その都度適切な言葉や表現を慎重かつ迅速に選択することができるという、言わば「人」としての能力を要求するものであった。事実、李景漢は「往々にして中国の事情は、その困難な点は事に対する問題ではなく、人に対する問題である」として（李景漢 1933: 50）、社会調査

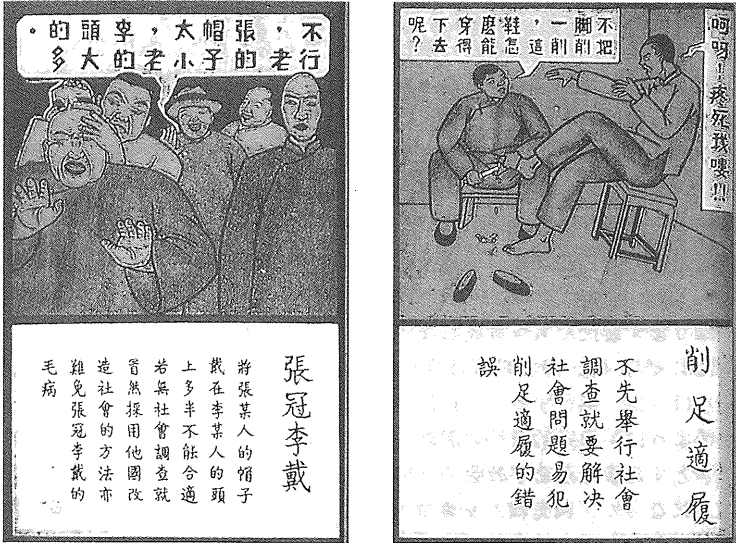


図1 農村社会調査で用いられた宣伝画（李景漢 1933：扉絵）

を成功させるための要諦は、何よりも調査員の人格的な能力や資質にあると明言している。そして、調査員の選定の基準として「忠実」「総明」「人情に通じていること」などのほかに「同情心」を挙げ、その理由を以下のように述べている。

中国の今日の状況において、調査される各種の社会現象は、至るところに悲しみと苦痛を与える。回答する相手は、その大半は生計が非常に苦しく、家の中やその他の面で思い通りにいかないことが多く、彼らを煩惱、鬱悶、不快のなかで生活させている。そのため、質問を受けるときに理解しようとしていない者、ふざけて話すも者、愚痴をこぼす者、ろくでもない目に遭わせる連中だと目をつり上げて怒る者もいる。これも不思議なことではなく、一般の人が乱世の害を飽きるほど受けているために、出会う機会があると彼らの怨恨が爆発してしまうのである。しかし、大多数は実直で善良な人である。彼らのほとんどは、苦しそうにため息をついて、常にこう語る。「まだそのことを持ち出すのか!」「もうやめてくれ!」「どうせろくでもない目に遭わせるのだろう!」「生きていくだけで精一杯なのに!」。顔には底知れぬ憂いの表情があり、涙を流す者もいれば、泣き喚きはじめる婦女もいる。彼らには安心が必要であり、人類の同情が必要である。明らかに、調査員は相当の熱意と同情心をそなえて、適切な言葉で同情の態度を示すものでなければならない。このことは、調査員に調査を成功させるというだけではなく、奉仕(服務)の機会でもあるのである。（李景漢 1933: 54, 下線部引用者）

ここで李景漢が、社会調査が「奉仕の機会でもある」と主張しているのは、単に社会改良家としての立場から語っているのではない。農村住民たちの無理解、懐疑、憤り、慟哭などの反応に日々向き合いながら調査を遂行せざるを得なかった彼にとって、「同情心」と「奉仕」を抜きにした社会調査の実践はおよそ有り得ないことであった。晏陽初も『定県社会概況調査』に寄せた序文で、「われわれが農民の家庭の歳入と歳出の状況を調査するためには、まず農民たちが書いたり計算したりすることができるように訓練しなければならない。つまり、農民たちが信頼し、すすんで助けてくれなければならないのだが、助ける能力については、やはりまず農民たちを育成しなければならない」と語っているように（李景漢編 1933: 晏序 4）、社会調査は農村住民に対する教育・啓蒙と一体となって進めなければ、遂行すること自体がそもそも根本的に不可能なものであった。

以上のように、学術的な社会調査と農村救済や農民教育の活動とを一体的に進めるべきとする李景漢と平教会の立場は、後に社区研究派からの厳しい批判を受けることになった。例えば、シカゴ大学に留学経験のある趙承信は、『定県社会概況調査』に対する辛辣な批判を行っている。彼によれば、李景漢は「多種の赤裸々な事実以外は評論と結論を下さない」と断っているが、そもそも問題に対する定義を抜きにした「赤裸々な事実」など有り得ない。事実、『『愚』『窮』『弱』『私』が人民生活上の基本的欠点』であるという「結論や方法について定県実験を指導する各先生はとっくに持っていた」のであって、結局のところ「社会調査が得た『事実』は社会問題の結論と社会改良の方法の提案に対して全く何の貢献もしていない」（趙承信 1936: 162）。彼はそう述べた上で、「社会改良式」の社会調査は、総じて調査者の改良の観念のために目を曇らされている。調査者が認める実際の問題が何かがそのまま調査するものとなり、結果として、調査者が集める事実は必然的に彼の頭の中で認めている問題を証明するためのものとなっている」と（趙承信 1936: 163）、結論や方法が調査に先んじて立てられていると批判している。

趙承信の批判は、アメリカ社会調査運動に対してシカゴ学派が投げかけた批判と同様のものであり、それ自体は一定の妥当性がある。しかし、李景漢が『実地社会調査方法』の中で示していることは、「同情心」と「奉仕」を抜きにして農村住民を調査に同意・協力させることが果たして可能なのか、また可能であったとして知識エリートの責務や倫理として望ましいことなのかという問題であった。李景漢は趙承信の批判に真正面から応えることをしなかったが、おそらく彼にとって社会調査の実践において重要なことは、上述の問題に誠実に向き合っているか否かであって、決して社会改良か学術研究かの二者択一にあるのではなかったと言えるだろう。

5 「以農立国」と農村合作社の構想

社会調査はある社会についての実情を調査するというだけではなく、それ自体が「社会」というものに対する認識を生産するプロセスでもある（佐藤 2011：493）。例えば18世紀末に北欧と北米ではじめて実施され、19世以降にヨーロッパにも普及していく国勢調査は、直接の目的は戦費増大に対応するための徴兵や徴税および選挙における議席配分などであったが、結果として「人口」と「ネーション」に対する認識を生み出し、後の「国民国家」の形成とナショナリズムの興隆をもたらした。（佐藤 2014：136-40）。また繰り返しになるが、ブースの貧困調査は貧困が個人の努力や資質ではなく「社会的」に対処すべき問題であるという認識を生み出したことで、ウェッブ夫妻など後の「福祉国家」につながる社会政策の思想と構想を可能にした。

李景漢について言えば、定県調査の実践を通じて、『以農立国』は老書生が常に語るものであるが、実際のところまったくその通りである」という、中国社会は農業と農村を根本に成り立っているという認識を生み出していくことになった（李景漢 1930：1）。彼によれば、「中国は農業を国の基盤としており、そのために中国社会の基礎は農村に建てられており、農村社会は中国社会の重心である。我々は中国全体の社会問題を解決しようとするならば、必ずまず中国の農村問題を解決しなければならない」（李景漢 1937：120）。陶孟和が最初期の社会調査論の文章の中で、社会調査は中国の多数者である農民の生活から着手すべきであると述べていたように（陶孟和 1918）、もともと中国社会学界には農村重視の志向性が存在していたが、1930年代以降は梁漱溟の郷村建設運動の影響や李景漢の定県調査の成功もあり、その多数は完全に関心が都市ではなく農村に移っていた¹⁷⁾。この潮流に対して、シカゴ大学でロバート・パークに学んで「都市社会学」を掲げていた呉景超は¹⁸⁾、都市の発展こそが農村救済の根本的な方法であることを明快に主張し、真に「以農立国」を実現しようとするならば、まずは農業技術を改良していくと同時に工業化による農村過剰人口を吸収することで、多数の人を生産効率の低い農業から解放することが必要であると訴えた（呉景超 [1936] 2008：65-7）。しかし、都市の発展力を軸にして中国社会を認識しようとする呉景超の立場は、当時の中国ではあくまで例外的な少数派に止まった。

李景漢は中国の農村が抱える問題の具体的な中身について、自身の農村調査の経験に基づき、(1) 政府と官吏への不信、(2) 困窮の広がり、(3) 衛生の軽視、(4) 知識の欠如、(5) 迷信の瀰漫、(6) 単調な生活、(7) 組織の散漫の7つを挙げている（李景漢 1935a）。とくに最後の点について、農村社会の現状を「ばらばらの砂（一盤散沙）」と形容し¹⁹⁾、以下のように「団結の力量の欠如」を嘆いている。

農民には団体組織の能力と習慣はなく、いわゆるばらばらの砂であり、団結

することができず、協力することができず、いたるところで公共心の欠如、同情心の薄弱が表れている。公益に関する事は、多くは拱手傍觀するのに、小事のためには私争し、命をかけることさえできる。優秀な者は表に出て活動しようと思わず、土豪劣紳がついに郷里を食い物にしてしまう。・・・ああ、哀しいかな。この種の組織の散漫、団結の力量の欠如は、実にわが民族の致命傷なのである。(李景漢 1935a: 12)

他方で李景漢は、中国の農村社会の持つ潜在能力にも言及している。彼によれば、中国の農民は忍耐力があるだけではなく、迷信に囚われず非常に聡明であり²⁰⁾、決して思われているほど「守旧」なのではない。例えば、調査している短期間のうちに井戸の掘削が瞬く間に全県に広まり、纏足や辮髪なども全く見られなくなった事実を例に挙げて、むしろ農民こそ新しいものを容易に受け容れる能力があると主張している(李景漢 1935b)。さらに、梁漱溟が農民を豆腐に、政府を鉄の鉤に例えて、政府が持ち上げようとするとうつ崩れる「農民の無力散漫」を形容したことに対して、「もし普通の柔らかい豆腐が凍った豆腐に変わった時、その固さは鉄石のようである。・・・この冷氣は一気に起こる一種の力であり、それは団体の組織力なのである」と、散漫であるからこそ結合力もより強固になるという論理を展開している(李景漢 1935b: 14)。

しかし、李景漢のこうした議論はエピソードの断片あるいは比喩の域を出ておらず、「団体の組織力」を生み出す具体的なプロセスや制度が何であるのかについて、明確に論じられることはなかった。しかし、彼の書き残した文章の中から一つ取り上げるとすれば、「合作社」(協同組合 co-operative の中文訳)の中にその可能性を見出していたとすることができる。

中国における合作社の運動は、1920年前後に一部の大都市で始まり、1923年以降に慈善組織の華洋義賑救災総会(以下「華洋義賑会」)が農村における飢饉防止を目的として、河北省を中心に合作社(とくに信用合作社)の設立を進めていた²¹⁾。この時期の「郷村建設」運動の隆盛の中心的存在であった梁漱溟も、合作社を飢饉の際の保障だけではなく生産をも能動的に担う経済の中心的組織として位置づけており、南京国民政府も孫文の民生主義思想に基づいて合作社を重要な国策運動の一つに掲げ、1934年9月に「合作社法」が、翌35年には実業部によって「合作社法施行細則」が制定・施行されている。

李景漢も定県調査に参加する以前から、合作社運動に関心を寄せていた。1927年の「中国農村経済合作社の発展」という文章では、中国における農村の没落の理由は健全な金融機関の欠如にあると述べて、欧米・日本で実施されている農村経済合作の新制度が必要であると主張している。その上で、「農民が今日の地位に陥ったのは、大半は彼らの互助協済の精神の欠如によるものであり、これは農村の発展の最大の障壁となっている。まさに合作社は、農民が結合する能力の訓練を始めようとするものである」と(李景漢 1927b: 3)、中国の農民に対する「互

助協済の精神」を養成するものとして合作社の意義を述べている。

『定県社会概況調査』では、李景漢が調査の活動拠点として起居していた翟城村における合作社の活動に詳しく触れている²⁹⁾。それによると、この村の郷紳である米迪剛は、1902年に日本に留学し、地方改良運動における「模範村」の運動に深く影響を受け、帰国後に父親とともに故郷で「村治」の運動を実践していた。1914年に米迪剛は翟城村に自治講習所を設立し、15年にはこの運動に着目した定県政府から財政支援を受けて自治公所に再編され、井戸の掘削や備荒貯蓄制度である義倉の設置などのほか、「因利協社」と呼ばれる合作社の事業を営んでいる。因利協社という名前は『論語』における「民の利する所に因りてこれを利す」という孔子の言葉に由来し、「全村人民の互助の精神を提唱し、全村人民の協同利益の発展を図ること」「村人民の固有の利益により、さらに進んで協力してこれを発展させ、共同生活の必要という感覚を持たせる」ことを理念とするものであった（伊仲材編述、[1925] 1968: 78, 李景漢編 1933: 104）。李景漢の記述によると、因利協社は、元は隣の県の綿花を共同で買い付けることを目的に設立されたものであるが、その出納を運営する金融協社は学校の基金など村の中の公的な資金全般を管理していたこと、職員は基本的に無給の名誉職であること、利益の一部を積立金とすることなど、村全体の公共的な事業や財政を担う役割を果たしていた。（李景漢編 1933: 104-5）。

李景漢は定県調査の後の1936年にも、『東方雑誌』に「中国農村金融と農村合作問題」という文章を発表している。その中で彼は、農村における健全な金融機関としての合作社の設立をあらためて訴えるとともに、中国の農民は「心理と精神の方面から言えば、農民は各自独立し、ばらばらの砂（一盤散沙）であり、相互の間に深い同情および共同意識が欠けている」ために（李景漢 1936: 20）、合作組織がなく「中間商人の搾取」を重く受けやすくなっていると論じている。そして、慈善団体である華洋義賑会の信用合作社を例に挙げて、この合作社が経済的な支援だけではなく、民衆学校や災害救済などの農村における様々な事業の中心的な機関になっていたことを評価した上で、農村に一つの健全な合作社が存在すれば農村全体の活動が活性化し、「農民合作の精神を養成するというだけではなく、彼らに次第に公衆に奉仕するという観念および、環境を改造するという要求を促す」という（李景漢 1936: 24）、派生的な効果をもたらすことになることと主張している。以上のように、李景漢は定県調査以前から断続的な形で、合作社が単なる経済的な問題を解決するだけではなく、農村における共同性と自治の再建をも可能にする、その中心となる組織として評価していた。

1934年から李景漢は清華大学社会学系に転任し、定県調査の経験に基づいて、近郊農村に実験区を設立して学生に対する社会調査の指導を行っていた。しかし、1937年7月以降の日中戦争で華北地方と沿海部の都市がほとんど日本軍に制圧され、晏陽初の平教会、梁漱溟の鄉村建設運動、華洋義賑会など、李景漢とも関わりが深い農村の社会運動は、華北地方を拠点としていたこともあり、ことご

とく活動の停止あるいは縮小を余儀なくされていくことになる。こうして、李景漢が中国の農村社会と合作社の中に見出そうとしていた「以農立国」の可能性は、「総力戦」の時代の中で押し流されていくことになった。

6 おわりに

本稿では李景漢の社会調査論とその実践を通じて、社会調査における被調査者との具体的な相互作用における困難中で、彼の「社会」に対する実践的な認識が形作られていくプロセスを描き出してきた。アメリカでの留学中に中国における統計調査の不在に「国恥」を強く刺激された李景漢は、帰国後に社会調査の実践に意欲的に関わり、とくに1928年以降の定県調査で農村住民の合意と協力を獲得しようとする過程で、彼らの「人情」に対する理解と「同情心」「奉仕」の使命感を深めていく。彼はこの調査体験の中から、「以農立国」の理念および「ばらばらの砂」という中国農村社会に対する認識を形成し、農村合作社を単に経済的な組織としてではなく、「ばらばらの砂」を克服して中国の農民に「共同意識」を育成する役割を果たすものとして期待を寄せていくことになる。

社会調査研究で多少なりとも直面する、社会問題の解決を志向する規範的なベクトルと科学的な実証性を求めていくベクトルとの「股裂き状況」は(天田 2009)、李景漢の中では全く問題にされていなかった。中国の農村と農民の深刻な窮状を、生活を共にしながらつぶさに目の当たりしてきた彼にとって、社会調査の遂行は、それ自体において社会改良の実践でもあり、またそれ以外では有り得ないものであった。

李景漢が取り組んだ社会調査それ自体は、当時においても批判されていたように、本来なら行政が担うべき実態調査の域を出ていなかったことは確かである。しかし、それは別の側面から言えば、エスノグラフィーとは異なり被調査者に一定の知識水準を要求し、本来は政府の権威や強制力に依存しなければ実現が不可能な性質の社会調査を、民間の社会学者が(大多数は非識字者である)農村住民の自発的な合意や協力を地道に獲得しながら進めていくという、きわめて困難な課題に取り組んでいたことを意味するものでもあった。彼が自らの社会調査の経験の中から提示した、農村社会における「人情」への認識や農民への「同情心」などは、単に社会調査の困難を解消する上での実践的な方法というだけではなく、中国の近代における下からの政治的な統合と社会的な連帯の可能性を示すものとしても評価することができる。

本稿では、社会調査の方法論の側面については十分に論じることができなかった。また社会学界の動向に対象を限定したため、国民政府の行政調査や共産党が根拠地で実施した階級調査、日中戦争の時期に行われた少数民族調査などについては、全く触れることができなかった。以上の残された課題については、機会を改めて検討していくことにしたい。

[註]

- 1) 社会調査の困難や権力性の問題については、桜井(2003)および佐藤(2011: 251-67)などで論じられている。ここで古くて「新しい」というのは、この10年における個人情報保護意識の高まりや住宅セキュリティの強化に伴う、全国世論調査やSSM調査の回収率の大きな低下および調査拒否の増加(社会調査協会編 2014: 34-5, 94),そして研究者と調査対象者との知識水準の落差が縮まったことを背景とする、社会調査における調査者/当事者という関係の自明性の深刻な動揺(宮内・好井編 2010),等々の事態を指している。
- 2) 同時代の社会学者である柯象峰は、李景漢、陳達、陶孟和などが実施した既存の都市家計調査や農村社会調査を寄せ集め、標準的な生活水準の家庭を定義した上で「貧窮線」を設定し、都市の労働者の5割(全人口の5%),農民の4分の3(全人口の60%)が貧民であると推計している(柯象峰 1935)。
- 3) この問題意識において、本稿は学説史研究ではなく、言わば社会調査の歴史社会学的あるいは知識社会学的な研究に位置づけられるものである(佐藤 2011: 490-1)。
- 4) 以下の中国社会調査史の概説的な記述については、主に閻明(2010)に従っている。
- 5) これらのテキストは、社会調査の目的、方法の分類、調査の手順、調査表や図表作成の例などを一通り列挙している以外は、とくに共通のフォーマットは存在していない。当時のアメリカの社会調査法のテキストで定式化されていた、「完全計査」「サンプリング」「ケースワーク」という社会調査の方法区分は(佐藤 2011: 170-4),ほぼ全てのテキストで紹介されているが、管見の限りテキスト全体の外枠として採用しているのは、樊弘『社会調査方法』のみである。
- 6) 以下の民間の社会調査機関の動向については、社会調査所が1933年のシカゴ万博に参加した際に発行した紹介パンフレットである『社会調査所概況』の記述に従った(社会調査所編 1933)。
- 7) 全国的な人口調査は、南京国民政府が成立した直後の1928年に実施が試みられているが、2年後の30年になっても中央に報告を行っている地方の省政府は半分を超える程度で、まったく不完全なまま終了している(王大任 2008)。
- 8) 断っておくと、正面から「社会学の中国化」というスローガンが掲げられたことは稀で、あくまで「西洋の社会学の学説・理論を教条的に中国の現実に当てはめるべきではない」という、民国期中国の社会学者の間で広く語られた、定型化された語法を指している。
- 9) ここで論じられている「文化失調」は、物質文化の急速の発展に対する既存の慣習的文化の不適應から社会問題発生 of 要因を説明する、ウィリアム・F・オグバーンの「文化的遅滞 cultural lag」の概念に由来している。中国では、アメリカ留学中にオグバーンに師事していた孫本文が、精力的に「文化失調」の議論を紹介していた(孫本文 1929)。

- 10) 戸田貞三『社会調査』にも同様に、人間関係の不調和の原因を明らかにすることが(戸田の定義する社会改良目的＝「狭義」の)社会調査の一つの目的であることが述べられている。「社会人としてもつべき連带的要求(自分等の形造る社会を尊重し、これを支持せんとする要求は社会人には常にあるべきであり、それは社会をなすものが共同にもつ連带的要求となる)において互ひに相距たることなければ、社会生活上に害悪、不安、不徳、犯罪等は殆ど起こらないであらう。・・・反社会的行為をなすもの生活水準を一般人のそれに近づけるために、これらのものの生活の状態、教養の程度、行動能力並びにかくの如き状態に陥つた過程等を調査して社会改良の方法を講ずる必要が起る」(戸田 1933: 11-2)。ただし戸田の言う「連帯」は、「社会人」という概念にも象徴されるように、「団体の全成員の生存要求に反する行動は如何なる構成員にも許されない訳であり、個体は全体の要求に強く結びつけられて居なければならぬ」という(杉田 2010: 71)、「団体」「全体」に対する忠誠と貢献を意味するものであった。管見の限り、このような全体性を持つものとしての「社会」概念は、民国期中国の社会学や社会政策のテキストには見られない(穂山 2015 a; 2015b)。李景漢について言えば、彼は「社会」という概念に「お互いに何らかの関係が存在していること」という以上の意味を与えなかった(李景漢 1933: 41)。
- 11) 以下の李景漢の経歴については、田彩鳳(1995)および范偉達他編(2008: 53-62)に従っている。
- 12) 調査統計の不備に対する劣等感について、李景漢は同様に以下のようなエピソードを記している。「私が六歳で小学に入学した時に、中国の人口は四億(四万万)であった。この言葉は、愛国の四億の同胞を示す名詞としてどこでも見聞きしたものである。小学を出た時も依然として四億の同胞であった。数年が過ぎて大学を卒業し、姪の教科書を手にとって見てみると、中国の人口は普通四億であった。海外で数年留学して帰国した後、また姪たちや、中にはその子供もいたが、使っている教科書はまだ四億であった。・・・アメリカは世界の中で最も富強な国家と呼ばれているが、その人口は一億一千万に過ぎず、わが国の人口との差はその数二億に止まらない。一つの国家が人口の確かな数さえ、さらには大体の数さえ全くわからないのだから、人口の密度、性別、年齢の配分などは言うまでもない」(李景漢 1933: 3)。
- 13) 晏陽初を中心とした平民教育運動の起源とその思想については小林(1985)に従っている。そのほか、1933年以降の定県の県政改革における平教会および平民学校同学会の役割については山本(2002)、さらに平教会の関係者が主導権を握る県政改革に対する地元の郷紳層の激しい抵抗と、その結果として平教会が政府の強制力への依存を強めていくプロセスについては宣朝慶(2011)に詳しい。
- 14) 李景漢が招聘されたのは、同僚であり研究仲間でもある燕京大学のキャンブ

ルが、もともと晏陽初と同じYMCAの活動家であったことと関係していると思われる。燕京大学のアメリカ人社会学者におけるYMCAおよび、YMCAを支援する大学生・大学教員の組織であるPrinceton-in-Pekingの役割と動向については、Chiang（2001）の第2章に詳しい。

- 15) 都市の知識階層による組織的な農村調査としては、学術調査というよりもジャーナリズムに近いが、1920年の犠牲者50万人と言われる華北大飢饉で、北京の学生団体が慈善組織に依頼される形で行なった被災地調査がある（穂山 2015c）。
- 16) このテキストでは直接触れていないが、李景漢が以下のように述べている通り、農村における衛生観念の落差は、都市生活者である社会学者たちの大きな悩みの種であった。「（調査者は農民に対して——引用者註）おそらくは不安に感じて、一緒に協力する事を嬉しく思わないかもしれない。というのも、農民自身のおいでで不快になり、家の台所の不潔さに我慢できなくなり、食べ物が粗末で食べられないからである。・・・多くの家庭は豚を便所に囲っており、豚はいつでも物が落ちてくるのを期待し、豚の食べ物の源の一つとなっている。私は最初に農家の便所を利用した時に、下に二つの大きな黒い物を発見し、二頭が争って食べていて、私をひどく驚かせた。外に出てそれを人に告げると、『そんな珍しいものじゃありませんよ』と笑われてしまった。その後、私は豚肉が好きだったのだが、それがすっかり冷めてしまった」（李景漢 1935a: 9-11）。
- 17) 民国期の出版物の包括的なデータベースである「大成民国図書全文数拠（<http://tushu.dachengdata.com/tuijian/showTuijianList.action>）」では、「農村社会学」「郷村社会学」と題するテキストが少なくとも9冊確認できるのに対して、「都市社会学」については呉景超の2冊のみである。
- 18) 「以農立国」論に対する呉景超の批判は、鄒干江（2015: 117-23）に整理されている。
- 19) 「一盤散沙」という中国社会の解釈図式が、近代中国の社会思想の中で、中国の近代化を構想する際の、言わば転轍手としての役割を果たしていたことについては、穂山（2014）で論じた。
- 20) 農民の聡明さの根拠として、李景漢は以下のエピソードを挙げている。「表面的には農民は迷信に囚われているように見えるが、鬼神の本来の姿に対する認識は非常に明晰である。例えば、しばしば雨乞いをして雨が降らない時があるが、農民たちは龍王爺（廟の神像——引用者註）に対しても遠慮することではなく、ある時にはそれを炎天下にさらし、ある時にはそれに尻を放ったりしている。つまり、役に立つ場合はそれを崇敬もするが、役にも立たないのでどうしてまだ媚びへつらうことがあるろう、ということなのだ。彼らは鬼神に対してもこのようであるのだから、人間に対してはより明晰、実直で、そして現実的でもあるのである」（李景漢 1935b: 12-3）。

- 21) 民国期における合作社の運動と政策については、とくにこの10年の間に研究の蓄積が進んでいる(趙泉民 2007, 菊池 2008, 張曼茵2010).
- 22) 翟城村における「村治」の運動については、米迪剛らが自ら編纂した『翟城村志』のほか(伊仲材編述 [1925] 1968), 浜口(1981a; 1981b)で詳しく検討されている. なお, 現在(筆者が訪問した2015年11月)の河北省定州市東亭鎮翟城村の入口には、「中国近代村民民主自治の第一の村 中国で最も早く設立された村の女子学校の所在地 中国で最も早く創設された農民合作社——因利協社の所在地 中国郷村建設運動の発祥地」と書かれた大きな塀が建てられている.

[文献]

- 阿部實, 1993, 「チャールズ・ブースと「貧困調査」」石川淳志ほか編『社会調査——歴史と視点』ミネルヴァ書房, 3-23.
- 穂山新, 2014, 「中国近代思想における「専制」「自由」「自治」——「ばらばらの砂」の近代」『社会学ジャーナル』39: 23-43.
- , 2015a, 「近代中国の社会政策思想——柯象峰の社会救済論」『社会学ジャーナル』40: 113-30.
- , 2015b, 「慈善と社会連帯のあいだ——日本と中国における社会的権利の形成をめぐる」『社会学評論』261: 2-18.
- , 2015c, 「災害体験とチャイニーズネス——1920年華北大飢饉を事例に」『日中社会学研究』23: 5-64.
- 天田城介, 2009, 「社会福祉と社会調査」社会福祉養成講座編集委員会編『社会調査の基礎(第3版)』中央法規, 21-30.
- Bulmer, Martin, 1991, “The decline of the Social Survey Movement and the rise of American empirical sociology”, Martin Bulmer et al. ed., *The Social Survey in Historical Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press, 291-315.
- Chiang, Yung-chen, 2001, *Social Engineering and the Social Sciences in China, 1919-1949*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 江里口拓, 2008, 『福祉国家の効率と制御——ウェブ夫妻の経済思想』昭和堂.
- 范偉達他編, 2008, 『中国社会調査史』復旦大学出版社.
- 福武直, 1946, 『中国農村社会の構造』大雅堂.
- 浜口允子, 1981a, 「米逢吉について——清末民初における郷村指導者」市古教授退官記念論叢編集委員会編『論集近代中国研究』山川出版社, 307-34.
- , 1981b, 「翟城村治」——近代中国における郷村再編成の試み」『人間文化研究』5: 13-26.
- 川合隆男, 2004, 『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生閣.
- 柯象峰, 1935, 「中国貧窮人口之估計」『新社会科学』1(4): 175-81.

- 菊池一隆，2008，『中国初期協同組合史論 1911-1928 —— 合作社の起源と初期動態』日本經濟評論者。
- 小林善文，1985，『平民教育運動小史』同朋舎。
- Lewis, Jane, 1991, “The place of social investigation, social theory and social work in the approach to late Victorian and Edwardian social problems: the case of Beatrice Webb and Helen Bosanquet”, Martin Bulmer et al. ed., *The Social Survey in Historical Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press, 148-69.
- 李景漢，1927a, 「中国社会調査運動」『社会学界』1: 79-100。
 ————, 1927b, 「中国農村經濟合作社之發展」『合作訊』20: 2-4頁。
 ————, 1929, 『北平郊外之鄉村家庭』商務印書館。
 ————, 1930, 「住在農村從事社会調査所得的印象」『社会学界』4: 1-14。
 ————, 1933, 『实地社会調査方法』星雲堂書店。
 ————, 1935a, 「深入民間的一些經驗与感想（上）」『独立評論』179: 8-12。
 ————, 1935b, 「深入民間的一些經驗与感想（下）」『独立評論』181: 12-6。
 ————, 1936, 「中国農村金融与農村合作問題」『東方雜誌』33(7): 13-24。
 ————, 1937, 『中国農村問題』商務印書館。
 ————編，1933, 『定県社会概況調査』中華平民教育促進会。
- 李章鹏，2008, 「社会調査与社会学的中国化 —— 以1922~1937年燕京大学社会学系為例的研究」黄興涛·夏明方主編『清末民国社会調査与現代社会科学的興起』福建教育出版社，47-91。
- 呂文浩，2008, 「重審社会学史上的社会調査派」黄興涛·夏明方主編『清末民国社会調査与現代社会科学的興起』福建教育出版社，92-131。
- 宮内洋·好井裕明編，2010, 『〈当事者〉をめぐる社会学 —— 調査での出会いを通して』北大路書房。
- 佐藤健二，2011, 『社会調査史のリラシー —— 方法を読む社会学的想像力』新曜社。
- 佐藤成基，2014, 『国家の社会学』青弓社。
- 社会調査協会編，2014, 『社会調査事典』丸善出版。
- 社会調査所編，1933, 『社会調査所概況（参加芝加哥博覧会特刊）』社会調査所出版社。
- 首藤明和，2014, 「中国の社会調査」社会調査協会編『社会調査事典』丸善出版，708-9。
- 杉田菜穂，2010, 『人口・家族・生命と社会政策 —— 日本の経験』法律文化社。
- 孫本文，1929, 『社会変遷』世界書局。
 ————, 1935 [1946], 『社会学原理』商務印書館。
- 陶孟和，1918, 「社会調査」『新青年』4(3): 221-4。
- 田彩鳳，1995, 「李景漢」賀崇鈴主編『清華人物志（三）』清華大学出版社，93-8。

- 戸田貞三，1933，『社会調査』時潮社。
- 王大臣，2008，「近代中国人口調査の現代化過程与方法論演進」黄興涛・夏明方
主編『清末民国社会調査与現代社会科学的興起』福建教育出版社，132-190。
- Webb, Beatrice and Sidney Webb, 1932, *Methods of Social Study*, London:
Longmans, Green.
(=1982, 川喜多喬訳『社会調査の方法』東京大学出版会.)
- 宣朝慶，2011，「地方精英与農村社会重建——定県実験中の士紳与平教会衝突」
『社会学研究』4: 1-14.
- 山本真，2002，「1930年代前半，河北省定県における県行政制度改革と民衆組織
化の試み」『歴史学研究』763: 17-33, 62.
- 閻明，2010，『中国社会学史——一門学科与一個時代』清華大学出版社。
- 言心哲，1934，「社会調査与中国社会建設」『社会学刊』4(3): 1-8.
- 余天休，1922，「中国社会学家之目的与責任」『社会学雜誌』1(1): 1-2.
- 伊仲材編述，[1925] 1968，『翟城村志』成文出版社。
- 吳景超，1929，『都市社会学』世界書局。
- ，[1936] 2008，『第四種国家的出路——吳景超文集』商務印書館。
- 張曼茵，2010，『中国近代合作化思想研究』上海世紀出版集團。
- 趙承信，1936，「社会調査与社区研究」『社会学界』9: 150-205.
- 趙泉民，2007，『政府・合作社・鄉村社会——国民政府農村合作研究』上海社会
科学出版社。
- 鄒于江，2015，『吳景超社会思想研究』中国伝媒大学出版社。

中国社会調査史年表（1915—1937）

年	出来事	論文・出版物
1917	清華学校のデイトマーが北京の郊外で家庭生活費調査を行う。	
1918	清華学校のギャンプルが北京の社会状況についてアンケート調査を行う。	陶孟和「社会調査」『新青年』4(3)
1920	この年発生した華北大飢饉で、北京の学生団体が慈善団体に依頼されて被災地調査を行う。	
1921		S. D. Gamble, <i>Peking: a Social Survey</i> . George H. Doan
1922	北京の燕京大学に社会学系が設立される。教員は全員アメリカ人。 北京大学の余天休が、中国で最初の社会学専門誌『社会学雑誌』を発刊。	
1923	バックリンが翌年にかけて上海の滬江大学を訪問し、学生とともに沈家行に対する社会調査を行う。 晏陽初らが北京の清華大学で中華平民教育促進会総会を設立する。	孫本文「一個社会調査大綱」『東方雑誌』20(15)
1924	燕京大学社会学系に最初の中国人教員である許仕廉が招聘される。 アメリカの宣教師らによって北京社会調査所が成立。李景漢が幹事となり、ギャンプルとともに人力車夫の調査を行う。	張鏡予編『社会調査』商務印書館
1925	社会調査籌備委員会(the Commission of Social Research)が組織される。	D. H. Kulp, <i>Country Life in South China</i> , Bureau of Publications Teachers College Columbia University
1926	燕京大学社会学系が社会調査の課程を開設。李景漢が講師に招聘される。 社会調査部が中華教育文化基金董事会の下部機関として設けられる。秘書は陶孟和、調査主任は李景漢。 中華平民教育促進会が河北省定県を実験区に選定する。 陶孟和が翌年にかけて北京の48世帯の労働者家庭の生活状況に対する調査を行う。	

1927	燕京大学社会学系が機関誌『社会学界』を発刊。 李景漢が燕京大学の学生と北京郊外の4つの農村に対する調査を行う。	李景漢「中国社会調査運動」 『社会学界』1 蔡毓驄『社会調査之原理及方法』北新書局 樊弘『社会調査方法』商務印書館
1928	許仕廉や楊開道など燕京大学社会学系が北京近郊の農村である清河鎮で社会調査を行う。 中華平民教育促進会が河北省定県で大規模な社会調査を行う。調査主任は李景漢。	陶孟和『北平生活費之分析』商務印書館 J.S.Burgecs, <i>The Guilds of Peking: Columbia University Press</i>
1929	社会調査部が北平社会調査所に再編される。所長は陶孟和。	李景漢『北平郊外之鄉村家庭』商務印書館 馮銳『鄉村社会調査大綱』中華平民教育促進会
1930	中国社会学社が設立される。会長は孫本文。機関誌『社会学刊』が発刊される。	L. S. Hsu (許仕廉) et al., <i>Ching Ho: Sociological Analysis, Yenchin Univ</i>
1931	中国社会学社第1回年次大会が開催される。	于恩徳『社会調査法』文化学社出版社 孫本文編『社会学大綱』世界書局
1932	シカゴ学派のR・E・パークが燕京大学で講義を行う。	
1933		李景漢『実地社会調査方法』星雲堂書店 李景漢『定県社会概況調査』中華平民教育促進会 言心哲『社会調査大綱』中華書局
1934		楊慶堃『鄒平市集之研究』商務印書館
1935	人類学者のラドクリフ＝ブラウンが翌年にかけて燕京大学で講義を行う。	孫本文『社会学原理』商務印書館
1936	清華大学大学院生の費孝通が江蘇省呉江県開弦弓村で蚕糸業を中心とした社会調査を行う。	陳毅夫『社会調査与統計学』商務印書館 趙承信「社会調査与社区研究」 『社会学界』9
1937		李景漢『中国農村問題』商務印書館。